

2015年 ノーベル文学賞受賞者 ポーランドの隣国  ベラルーシ初、ジャーナリスト出身初の受賞
 授賞理由：我々の時代における苦難と勇気の記念碑と言える多声的な叙述に対して



スヴェトラナ・ アレクシエーヴィチ について



越野 剛

2015年のノーベル文学賞に選ばれたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチはベラルーシの作家だが、生まれはウクライナであり(父はベラルーシ人、母はウクライナ人)、ロシア語で作品を書いている。

ベラルーシもウクライナもロシアも作家が誕生したときにはソ連というひとつの国家だった。むしろアレクシエーヴィチを今はなきソ連を代表する作家だと言った方がよいかもかもしれない。実際、彼女の作品(幸いにもほとんどが邦訳されている)は、独ソ戦争、アフガン戦争、原発事故、ソ連崩壊の混乱などを体験し、社会主義時代の記憶を刻み込まれた人々の語る声を丹念に拾い集めたものだ。

ちなみに原発事故で生活に影響を被った人々に取材した『チェルノブイリの祈り』(岩波書店、1998)は、今の日本人にとっても必読の書だろう。

ベラルーシは独立後も社会主義的な制度の多くを保存し、国民の多くがそのような政策を支持している。ヨーロッパ最後の独裁者とも揶揄されるルカシェンコ大統領は、ソ連への強いノスタルジーを公言してはばからない。ノーベル文学賞がアレクシエーヴィチに決まって1週間も経たないうちに、ルカシェンコが5度目の大統領選挙に勝利したというニュースが報道された。日頃は国際的なニュースに縁のないベラルーシ人にとって何とも皮肉なめぐりあわせである。

アレクシエーヴィチの作品はドイツを初めとするヨーロッパで好意的に紹介されたことがノーベル賞につながったと思われるが、もともと旧ソ連地域の知識人の間でも高く評価されていた。しかし戦争や原発事故の忘れてしまいたいような醜い側面をさらけ出す彼女の作品は、ロシアやベラルーシでいつも歓迎されてきたわけではない。例えば『アフガン帰還兵の証言』(日本経済新聞社、1995)は戦争の悲惨な場面だけを歪めて描いているとして、90年代のベラルーシでは帰還兵や遺族の一部がアレク

シエーヴィチを訴えるという騒ぎになった。

ルカシェンコが大統領になってから彼女の作品はベラルーシの出版社が扱うことはなくなり、すべてロシアで刊行されるようになった。そのロシアでも、西欧で作家の評価が高まるのと比例するかのようには、アレクシエーヴィチは反ロシア・反愛国的な作家だとして弾劾する声が目立つようになっている。ロシアによるウクライナへの干渉やクリミア征服を批判するような彼女の勇気ある発言も、ロシア人のナショナリズム的な反感の火に油を注いでしまった。

ベラルーシでは少し事情が異なっている。ロシアによるウクライナへの軍事介入にはルカシェンコも実は批判的であり、奇しくもアレクシエーヴィチの立場と重なっている。しかもノーベル賞というブランドの力は大きいだろう。今まで何人もノーベル賞受賞者を出しているロシアとは違い、ベラルーシという小国でこれほど国際的に榮譽のある評価を受けた人物はアレクシエーヴィチが初めてである。

いままで作家を無視し続けてきたルカシェンコ政権も今回は彼女に祝辞を送らざるをえなかった。ベラルーシの教育省では作品を高校の授業に取り入れることを検討しているという。アレクシエーヴィチのノーベル文学賞受賞は、ベラルーシ人が社会主義の記憶の呪縛から解放され、自分たちの歴史を見直すきっかけになるのかもしれない。

[北海道新聞 2015年11月2日夕刊5面より転載]



*こしの・ごう 1972年札幌生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。2001-03年在ベラルーシ日本大使館専門調査員。現在は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授。専門はロシア・ベラルーシ文学。訳書に『風に祈りをーリホール・バラドゥーリン詩集』春風社、2007年などがある。